夢を応援基金 ～東日本大震災奨学金制度～

2016年度 活動報告

制度概要

名称	「夢を応援基金」(東日本大震災奨学金制度)
奨学金	月額30,000円(給付、返還不要)
奨学生	約1,097名（2011年9月奨学金給付開始時の人数）
目的	本奨学金は、2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下「本震災」という。)によって経済状況が急変、または悪化し、就学継続が困難な状況にある、日本国内の高等学校及び高等専門学校(1~3年)、並びに高等専修学校に在籍する生徒に対し、大学など上級学校卒業までの間、奨学金を給付することにより、経済的不安を緩和し、学習効果を高めることを目的として寄与するものです。
運営体制	創設者：株式会社ローソン 運営主体：公益社団法人Civic Force 基金事務局（奨学生等との窓口業務）：特定非営利活動法人チャリティ・プラットフォーム *この事業は、Civic Forceの「中長期復興支援事業」の一環として運営されています。また、奨学金を含む運営のための資金は、ローソンによる店頭募金やマルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」で受け付けられた募金、Pontaポイント・dポイントでの募金のほか、Civic Forceオンライン寄付などで受け付けられた寄付により賄われています。
支援の内容	■ 月額3万円の奨学金給付(返還不要) ■ 教育プログラム（ボランティア活動、奨学生交流会など）の実施によるサポート ■ その他被災地の生徒や学校からの意見も取り入れ、現地のニーズに合わせた様々なサポートプログラムを実施予定
対象者 *募集当時	高校進学を控えた中学3年生（予約奨学生）、高等学校、高等専門学校（1～3年）等に在籍していた生徒
応募資格 *募集当時	下記(■)の条件をすべて満たし、かつ、AまたはBのいずれかに該当すること ■ 本震災時に家計を支える方が岩手県・宮城県・福島県に居住しており、同地域の学校に通学していた生徒 ■ 学校の推薦を受けることができる品行方正な生徒 ■ 夢をかなえるために、意欲と根性があり、東北の復興への貢献を希望している生徒 ＝＝ A.本震災により家計を支える方が死亡・行方不明・負傷病気・失業等の被害を受け、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒 B.本震災により居住していた住宅が半壊・半焼または床上浸水以上程度の被害を受け、または計画的避難区域になっているなど、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒
支給期間	2011年9月より高校・高等専修学校卒業または専門学校・大学などの上級学校(大学院除く)卒業までの最大7年間 ※2011年度は、2011年9月から2012年3月までの7カ月間。以降、毎年進学時に更新手続き有り
注意事項	受給者は、奨学金の返還義務を負いません。また、奨学金の主たる提供者(株式会社ローソン等)への入社等その他の付帯義務を負うものではありません。 **※2017年3月現在、奨学生は募集しておりません。**

「夢を応援基金」運営協力企業

株式会社教育新聞社
運営のための様々なご協力をいただいております

特定非営利活動法人ブリッジフォースマイル
運営のための様々なご協力をいただいております

株式会社七十七銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただいています

株式会社東邦銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただいています

株式会社岩手銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を
免除いただいています

第6期活動概要

2011年3月11日の東日本大震災発生から半年後の2011年10月、株式会社ローソン（以下、ローソン）からのお申し出により立ち上げられた「夢を応援基金」より、第1回目の奨学金が奨学生1,097名に支給されました。「夢を応援基金」では、2,400名の応募の中から選ばれた1,097名の被災学生に対し、高校入学から大学を卒業するまでの最長7年間、奨学金を支給します。

第1回目の奨学金支給開始から約5年半ーーー2016年4月、5回目となる更新手続きでは、145名の子どもたちが就職等で奨学金を終了し、社会に羽ばたいていきました。2016年度は上級学校に進学した15名を含め、346名の奨学生に奨学金を支給しました。1年間の奨学金支給を経て、2017年3月、「夢を応援基金」は皆様のご支援のおかげで、無事、第6期を終了することができました。

基金の創設者であるローソン、そしてローソングループの店頭募金にてご協力をくださった多くの皆様、オンライン寄付によりご寄付をいただいた個人の皆様に、活動のご報告と併せまして、心より御礼を申し上げます。

夢を応援基金の主な活動		
2017年	4月	2017年度更新手続きを実施
	1-3月	図書進呈プログラムを実施
2016年	8月	宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2016年度更新手続きを実施
	3月	■全国のローソングループ各店で店頭募金を実施（一ヵ月間） ■「夢を応援フォトコンテスト2016」を実施
	2月	仙台で開催された復興応援イベント「LAWSON Presents ドリームトークショー＆クロストークディスカッション＋ライヴ」に奨学生が参加
2015年	8-9月	宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2015年度更新手続きを実施
	2月	ローソン店頭マルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」を通じた募金の受付を開始
2014年	8月	宮城県で奨学生交流会と夏の体験プログラムを実施
	7月	岩手県で奨学生交流会を実施
	4月	2014年度更新手続きを実施
2013年	11月	仙台で奨学生交流会を実施
	8月	東京で奨学生交流会を、宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2013年度奨学生の更新手続を実施
	3月	■「夢を応援基金」の運営主体が公益社団法人Civic Force（シビックフォース）に移行 ■全国のローソンで、募金告知のため『1,097のありがとう。』（小冊子）を配布 ■全国のローソングループ各店で店頭募金実施（～5月末）
	1月	奨学生のうち、高校2年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布
2012年	5月	予約奨学生（申込時に中学3年生で、新高校1年生）への奨学金支給開始
	4月	2012年度奨学生の更新手続を実施
	3月	■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～5月末） ■奨学生のうち、高校2年生及び高校3年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布 ■基金奨学生募集時に、申請書を提出した学生が在籍する高等学校及び高等専門学校に対し、自立支援ハンドブックを寄贈
	2月	ローソン主催による、被災3県の高校生を応援する夢を応援基金「スペシャル講演＆ライブ2012」を仙台市で開催。約700名が参加
2011年	12月	ローソングループ社内募金の受付開始（給与天引き制度）
	11月	旺文社様からのご寄付と寄贈により、奨学生募集時に申請書を提出した学生が在籍する高等学校、高等専門学校、中学校全358校に対し、『それでもいまは、真っ白な帆を上げよう』を2冊ずつ寄贈（合計716冊）
	10月	■第1回目の奨学金を支給 ■奨学生とならなかった生徒には、支援金3万円とローソンプリペイドカード6千円分を進呈
	9月	1,097名の奨学生が決定（応募総数2,400名）
	7月	被災地（岩手県、宮城県、福島県）の高等学校、高等専門学校、中学校等に奨学生の募集を告知し、奨学生を募集
	5月	■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～8月） ■ローソン各店舗にて、寄付つき商品の販売を開始（その後随時実施）
	4月	「夢を応援基金」創設
	3月	東日本大震災発生

卒業生からのメッセージ-1

2017年春、多くの奨学生が夢への第一歩を踏み出しました。
寄付をいただいた皆様へ御礼のメッセージが届いています。

「行政栄養士に」―宮城県出身

夢を応援基金の奨学金制度のおかげで、大学で自分の学びたい分野を深く学べたことに大変感謝いたしております。まさに、夢を応援していただく制度で、おかげさまで、栄養士として働く夢が叶いそうです。就職が決まることはゴールではありませんが、今後は奨学生として採用していただいたことに感謝しながら、仕事に精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

「自分の経験を防災対策に生かしたい」―福島県出身

震災を経験し、辛いことや苦しいことがたくさんあり生きていくことが辛いと感じたこともありましたが、支援してくださる方や応援してくださる方を思い浮かべると、頑張ろうという思いが湧いてきました。大学生活の中で、新しい夢を見つけ、同じように震災で苦労している人たちや、これから起こると言われている地震の防災対策に、私の経験を生かして社会に貢献していきたいと思い、公務員になりました。これからは、支援してくださった方に恩返しができるよう、社会のために自分にできる事は何か考えて生きていきたいと思います。本当にありがとうございました。

「夢は心理カウンセラー」―宮城県出身

大学に通えたことは私にとってとても大事な出来事でした。何故なら、大学に進学したことで、自分の人生をかけてやりたい仕事が見つかったからです。それは、心理カウンセラーです。心が弱くなったときに、支えてあげられるような技術を一生かけて身につけたいと思います。夢を応援してくださり、ありがとうございました。

「警察官として恩返しを」―宮城県出身

夢を応援基金の支援により、中学生の時からの目標であった警察官になることができ、ローソングループをはじめとする支援者の皆さまには本当に感謝しています。これからは県民の皆さまの平和を守ることで恩返ししていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

「夢だった介護の現場で」―岩手県出身

4年間、支援し続けてくださりありがとうございました。あっという間ではありましたが、皆さんの支援のおかげで充実した毎日を送ることができました。4月からは小学校の頃から夢に抱いていた介護の現場で働きます。皆さんへの感謝の気持ちを胸に、新たな環境でも頑張っていきます。4年間お世話になりました。そして、ありがとうございました。

「共に成長しながら」―宮城県出身

ご支援をしてくださった皆さまのおかげで、保育士になるという長年の夢を叶えることができました。震災から6年間ずっと支えてきてくださった皆さまに恩返しができるよう、これから保育の現場で日々子どもたちと向き合い、共に成長しながら頑張っていきたいです。また、今度は自分自身が未来を担う子どもたちの夢を応援していきたいと思います。たくさんのご支援を本当にありがとうございました。

「大学院に進学」―岩手県出身

この度は奨学金をいただき、ありがとうございました。おかげさまで大学生活において勉学に励むことができ、大学を卒業することができました。また、勉学に励ませていただいたおかげで、大学卒業後は大学院に進学します。そこでさらに勉学に励もうと思っています。大変お世話になりました。重ねてお礼申し上げます。

「地元の発展につながるように」―岩手県出身

今まで支援してくださった皆さま、本当にありがとうございました。
震災の影響で自宅は全壊し、経済的にも大きな打撃を受けました。そのような中、夢を応援基金の奨学生として採用していただきました。支援してくださった方々のおかげで、助産師になるための学校に入学し、勉強をすることができています。私は奨学生として採用されなければ助産師という夢を諦めていたと思います。たくさんの方々への感謝を胸に、少しでも岩手県の発展につながるように今後も努力していきたいと思います。
ご支援をしていただき本当にありがとうございます。感謝申し上げます。

卒業生からのメッセージ-2

応援していただいた皆さんに「恩送り」をしていきたい―岩手県出身

4年間応援していただきました。
応援していただいたおかげで、助産師の夢をつかめそうです。
4年間で、さらに親の気持ち、母子の絆を学びました。それは、自分に置き換えても、そんな存在と死別したことを実感する、すごくすごく辛い時間でもありました。でも、この夢を自分で選択したことは、自分が社会に出ていく上で、同じような体験をした母子に関わることができるからだと今は思います。
４年間は、正直、周りにいる大学生を別の世界の人間と思うほど、勉強と実習だらけのものでした。だけど、この職を本当に誇りに思います。
４年間、支えていただいてありがとうございました。応援していただいたみなさんに恩返しは難しいかもしれません。しかし、私は恩送りをしていきます。ありがとうございました。

社会に貢献して少しでも恩返しを―宮城県出身

3月に無事大学を卒業いたしました。震災直後、まさか大学に行けるとは思いもしませんでしたが、皆さまのご支援のおかげで大学に入学、そして充実した4年間を過ごすことができました。皆さまには感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。4月からは、憧れであったグランドスタッフとして成田国際空港で働きます。仕事に励み、社会に貢献していくことで皆さまに少しでも恩返しができればと思います。私だけでなく、震災で家族を失い将来に不安を抱いている学生はたくさんいるかと思います。どうか、そんな学生をこれからも明るい未来へ導いていただきたいです。改めて、この4年間支えていただき本当にありがとうございました。

夢を諦めず－岩手県出身

私は中学2年生の時に東日本大震災を体験しました。あの日から早くも6年が経とうとしています。今は美容専門学校に通っていて3月で卒業します。そして新たな道、美容師への道へと進もうとしています。自分の夢がここまで叶ったのは家族の支え、友人、全国からの支援のおかげです。特にローソンさんにはとてもお世話になりました。学生の間毎月支援金をいただき本当に感謝の言葉しかありません。そのおかげもあり、高校、専門学校でも無理不自由なく自分らしく1日1日を過ごせました。これから社会人になるひとりの大人として、次は私が震災で苦しんでいる人に恩返しをしていきたいです！ひとりにできることは小さいことかもしれませんが、それが誰かの何かを変えるかもしれません！そんな人に私は成長していきたいです！
本当に6年間支えていただきありがとうございました。

夢だった幼稚園教諭に－宮城県出身

夢を応援基金を支給していただき、本当にありがとうございました。
震災で被災して、大学に行くことを諦めかけたとき、この募集を見て応募し、たくさん支援していただいたおかげで大学を卒業することができました。そして幼い頃からの夢であった幼稚園教諭という夢を叶えることができました。支給していただいたお金は大学資金、そして就職活動のために使いました。将来の安定を考え公務員試験を受けることができたのも支給していただいたおかげです。私は石巻市役所から内定をいただき、幼稚園教諭として働きます。たくさんの人に支えていただき今の自分があることを忘れず、今度は子どもたちのために頑張っていきたいと思います。
本当に本当にありがとうございました。

※学年は2017年3月時点のものです。

サポートプログラム実施報告-1

2016年3月 奨学生の「今」を伝えるフォトコンテストを実施

2016年3月、夢を応援プロジェクトサポートプログラムのひとつとして、フォトコンテストを実施しました。このコンテストは、震災から5年の節目に奨学生の今やこれまで歩んできた5年間を伝えるとともに、被災地の課題や現状などを奨学生目線で広く世に伝えるという目的のもと、実施されました。
日常生活の中のひとコマや故郷の風景など、奨学生ひとりひとりの「今」が伝わる作品の応募が多数ありました。
プロの写真家にも審査に加わっていただき、厳正なる審査が行われた結果、最優秀賞１作品、優秀賞２作品が選出されました。

最優秀賞受賞

久保田 綾さん（岩手県出身）

たくさんのものや町、大切な人までも奪ってしまった海。それでも変わらずに静かにそこにいる。悔しくて憎みたいけれど、海と一緒にここまで育ってきた自分にはなぜかできなくて、大好きだからなんだなあ、という思いから応募させていただきました。
まさか賞をもらえるなんて思っていませんでした。とても嬉しいです。

●審査員からのコメント
「素晴らしい景色。最後の『私たちの海』という表現に全てが凝縮されている」

優秀賞受賞

亀谷 真美さん（宮城県出身）

気仙沼の復興が進むようにという想いを込めてこの龍の松の写真を撮りました。
地元で撮った写真で賞をいただけたことがとても嬉しいです。これをきっかけに少しでも気仙沼のことを知っていただけたらと思います。ありがとうございました。

●審査員からのコメント
「気仙沼の海とともに力強く生きようとする逞しさを感じる。この震災を未来に伝えることが重要」

優秀賞受賞

稲田 圭薫さん（福島県出身）

何かを変えようとしても、私には目の前の風景が写真のように見えてしまいます。媒体にすることで少しでもこんなふうに見えなくなればいいと思って制作しました。

●審査員からのコメント
「思いをストレートに視覚化したデジタル合成。こんな表現ができるのだから、もう前進できていると思う」

サポートプログラム実施報告-2

2016年8月 東北の「今」と「未来」を考える、体験型研修を実施

2016年8月19～21日、宮城県気仙沼市において、今年で4年目となる体験型研修「森は海の恋人プログラム」を実施しました。「自然の“環”から、人の“和”を育てよう！」をキャッチフレーズに、環境教育・森づくり・自然環境保全の分野で活動するNPO法人「森は海の恋人」の協力のもと実施された同プログラムには、宮城県出身の大学生２名が参加。
森は海の恋人の理事長であり、2012年フォレストヒーローに選出された畠山重篤（しげあつ）さん直々にご指導いただきながら、植樹体験をしたり、復興まちづくりに日々奮闘する三浦友幸さんから震災直後の避難所運営やそこから見えてきた課題、震災から５年が経過した今直面している課題などについてお話しいただきました。ニュースや新聞では伝えられていない「被災地の今」を知り、故郷への思いをさらに深めることができた、充実したプログラムとなりました。

「いろんな角度から物事を見ることの大切さ」
木村 朋広さん（宮城県出身）

山と海の関係性を知り、知識を深めたいと思って参加しました。豊かな海はきれいな森によって育つと知り、考えさせられました。一つのことだけでなくいろんな角度から物事を見る大切さを学ぶことができました。

「地域の復興に関わっていきたい」
今野 靖子さん（宮城県出身）

生まれ育った南三陸町の隣にある気仙沼の復興の様子を知りたくてプログラムに参加しました。防潮堤の問題や、森と海の関係などを見聞きして、人のつながりの大切さを感じました。被災した地域の出身として、これからも移りゆく情報を取り入れ、地域の復興に関わっていきたいです。

2017年2月-3月、図書進呈イベントを実施

2017年2月から3月にかけて、図書進呈イベントを実施しました。
昨今、活字離れが叫ばれていますが、スマートフォン普及やインターネット環境の整備が進み、日々目にする活字の量はむしろ増えているという調査結果があります。しかしその一方で書籍などの紙媒体に触れる機会が急激に減少しているということも問題となっています。そこで、奨学生の皆さんに今話題の本、長年にわたり多くの人々に愛されている本など計15冊の中から希望の図書を進呈し、読書体験の機会を提供する取り組みを行い、参加者の皆さんに読書感想文を書いていただきました。感想文の一部をご紹介します。

斉藤 新さん（宮城県出身）/ 「コーヒーが冷めないうちに」を読んで

「もし、過去をやり直せたら・・・」誰もが考えることだと思う。好きな人との死別など人間関係での後悔、就職活動などの人生の分岐点での選択のやり直しなど、過去をやり直したいという人の動機は十人十色だろう。
私にとってそれは東日本大震災だ。当時私は高校生だった。宮城県気仙沼市で被災し、家を失った。幸い私の家族は全員無事だった。それでも当時は、何ができるかはわからないが、過去をやり直したいとばかり考えていた。この小説は、過去・未来の自分が望んだ場所に移動できるという都市伝説がある喫茶店が舞台の作品。カップル、夫婦、姉妹、家族など、問題を抱えた人たちがこの店を訪れる。しかし、時間を移動できるのはコーヒーが冷めるまでのわずかな時間、さらに、移動した時間での行動は現在へと影響を与えない。それでは、なぜこの喫茶店は存在するのか。それは過去に向き合って、今を生きるためではないだろうか。過去は変えられない。でも、未来なら変えられるかもしれない。過去をやり直すのではなく、過去を背負って生きることが人生だとこの作品から考えた。2011年の東日本大震災が起きた後、何度も「過去をやり直せたら」と考えた。そんな時に神戸から来た社会人ボランティアの人と知り合った。「阪神・淡路大震災から復興した。東北も必ず復興できる」という言葉に元気をもらった。この「コーヒーが冷めないうちに」という本も、前に進む勇気をくれる本だった。誰にも言えない問題を抱えている人たちに読んでもらいたい一冊だ。

※学年は2017年3月時点のものです。

奨学生の2016年度の振り返り-1

奨学生に、2016年度を振り返って、「最も力を入れたこと」「成長した点」などをテーマに課題作文を書いてもらいました。ここに、その一部を紹介します。

【この１年間で最も力を入れたこと】

「大学公式パンフレットの製作で、活動を新たなステージへ引き上げる」―大学４年/宮城県出身・京都府在住

私がこの1年間で最も力を入れたことは、大学機関所属の学生ボランティアコーディネーター（地域と学生をつなぐキューピットのような存在）としての活動を成長させるため、新たな試みに挑戦したことです。以前から活動を続けている里山保全ボランティアでは、参加者から企画者となりました。この企画が終わってからも定期的に地域の人との交流を続ける学生が増えました。現在はこの活動を継続できるよう、これまでの経験の後輩への引き継ぎに取り組んでいます。この他にもさらに私たちの活動の幅を広げるために、大学に直談判して大学公式のパンフレットを製作しました。製作するにあたっては学生団体特有のモチベーション低下を食い止め、活動への意欲が湧くようなものにしたいという強い思いから、教員・職員を巻き込んだ大掛かりのプロジェクトとなりました。今年度このパンフレットを使って、活動を新たなステージへと引き上げたいと思っています。

【この１年間で最も印象に残っている出来事（嬉しかったこと・楽しかったこと）】

「新しいことに取り組む勇気」―大学4年/宮城県出身・宮城県在住

大学３年生の１年間で最も印象に残っている出来事は３月から始めたインターンシップの活動です。今まで消極的でなんでも断りがちだった自分を変えたかったという気持ちで参加を決めました。メンバー全員がweb開発は初心者であったため、最初の３ヶ月ほどはwebプログラミングの学習をしていました。その後のシステム開発では、このプロジェクトのリーダーに抜擢され、経験がないために不安でしたが、少人数メンバーであることや他の二人が先輩であることもあり、うまくまとめることができたと思います。ここで開発したシステムは私の通う大学の職員の方々にプレゼンし、いくつかの改良を加えた後で実際に学校のシステムとして使っていただけることになりました。このインターンシップを経て、新しいことに取り組む勇気や社会人、リーダーとしての経験など多くの人間としての成長ができたと感じています。そして、この活動の中で出会ったwebプログラマという道が、今まで将来について悩んでいた私の進路決定に大きな影響を与えてくれました。これからプログラマのプロになれるように努力していきたいです。

【この1年間で私が学んだこと】

「家業から学んだ責任感と信頼関係の大切さ」―大学4年/岩手県出身・京都府在住

私は昨年11月に大学院の先生の紹介で、中国で開かれている「アジア災害トラウマ研究会」という学会に参加しました。学部生は私のみで不安が多かったですが、災害に関する学会ということでとても興味があり参加しました。大学進学のために地元を離れ京都で一人暮らしをしていますが、地元にいたときよりも災害に対する不安、恐怖は大きくなったように思います。まわりの人々は6年前の震災のことを忘れているわけではないと思いますが、やはり他人事で、それが悪気がないとはわかってはいますが、どこか孤独感を感じたり言葉が刺さったりすることを経験しました。そんな矢先、中国での学会のお話を聞き、参加を決めました。学部の講義は主に実験ばかりで臨床はほとんどないため、改めて自分のやりたいことを深く学べた機会だったと思います。今年の学会では、現段階で被災体験を中国の同世代の方と対談式の発表をする機会をいただくことになる予定なので、自らの体験を多くの人に伝えられることができたらと思います。被災した私たちにしかできないことなので、しっかりやり遂げたいです。

【この1年間で私が成長した点】

「病気を機に夢への道筋が見えてきた」―大学4年/宮城県出身・神奈川県在住

私が追っている夢であるプロのオーケストラプレイヤーは想像できないくらいの難関であると理解しています。音大に入学してから朝から夜遅くまで必死に練習を積み重ねてきました。将来の不安などで色々と思い悩み体調を崩し、検査の結果、難病を発症していることが分かりました。こんな病気をしたことで夢を諦めなければならないのかと思った時、本当に落ち込みました。しかし病気をしたことで今与えられている環境を生かし病気と付き合いながら一日一日を自分のできる限りの努力をして、焦らずじっくりと夢に向かって一歩一歩進もうと覚悟を決めることができたと思います。その第一歩として、地元である仙台のプロのオーケストラ「仙台フィルハーモニー管弦楽団」のクラリネット奏者のオーディションに挑戦しました。結果は不合格でしたが、将来の道筋が見えたように思います。いつ夢を叶えられるかはわかりませんが、一度っきりの人生、まだまだチャレンジしていきたいと病気になって尚更感じるようになりました。それも震災後、夢を応援基金に助けていただいたおかげだと心から感謝しております。音楽を通じて自分も人になにかしらの助けになれる人間になりたいと思っています。

奨学生の2016年度の振り返り-2

【この1年間で私が学んだこと】

「人の人生に寄り添いサポートしていきたい」―大学4年/宮城県出身・静岡県在住
私は、福島の女子高生向けのキャリア教育プログラムに３年間携わり、様々なことを学んできました。３年前の私は、在学中に起業することしか考えておらず、周りの人より自分のことばかり考え、身近な人たちの思いを理解しようとしていませんでした。その私が、このプログラムに参加し、高校生や大学生と関わる中で、相手の思いに寄り添い、共に努力することの素晴らしさを学びました。都市部に情報が集まることで地方の若者にとって不利な場合があります。例えば、就職活動の際、地方の若者は時間とお金をかけて都市部に行かなければいけないことがあります。経済的に問題を抱えている若者には、大きな負担になります。この問題を解決することは、私の将来の夢である「南三陸町の子どもたちに国際交流の機会を提供する」ことにも繋がると思います。一人一人が自分の夢を叶えることができる社会こそ、豊かで幸せな社会であると私は思います。

【震災から６年を振り返って思うことや感じていること】

「町の復興に全力を尽くす医者になりたい」―大学4年/福島県出身・福島県在住
2017年4月1日に、私の生まれ故郷である富岡町の避難指示が、一部帰宅困難区域を除き解除されます。しかし、避難指示が解除されるとしても実際に町に帰る人々が少ないというのが現状であり、全町民の6割は今後帰ることはないと答えています。やはり帰宅するうえでネックになるのはまず第一に病院、その次に特にご年配の方々で車を持っていない方々の移動手段の確保ではないでしょうか。特に前者は身近に診療所があるといっても夜まで病院がやっていなかったり、医師がその地域に住んでいるのではなく派遣されてくる医師だったり、もし夜に何かあってからでは遅いと考える人が多く、それにより帰還する人が少ないと思われます。そのような状況の中で私の故郷である富岡町では避難指示解除前からこの町で生活し医師として働いていた方が、家族を避難先に残し、自身は単身赴任により帰還して医師として働く決断をしたというニュースが話題となりました。また同様に双葉郡にある広野町では、高野病院の高野医師が昨年冬に亡くなるまで、双葉郡唯一の病院の医師として震災後避難せず働き続けたというニュースも話題となっています。

このように、医師という仕事に誇りを感じ、愛着のある自分の生まれた町(地域)で働き、住民に寄り添い続け、町の復興に全力を尽くすそんな医者になりたいと感じるようになりました。卒業まであと3年ありますが、この気持ちを忘れずに全力で勉強や実習に取り組み、いずれそのような医師になることを目指して頑張りたいです。

【来年度チャレンジしてみたいこと】

「今までにはない自分を見つけたい」―短期大学2年/宮城県出身・アメリカ在住
私は、2015年の夏からアメリカの短期大学であるオレンジコーストカレッジに通っています。夏でこの2年制大学を卒業し、秋には留学当初からの目標であった4年制大学への編入が決まっています。アメリカの大学は、入るのは簡単だが、卒業するのは難しいとよく言われているように、偏差値や倍率ではなく卒業率の高さがその学校の指標になります。2015年の夏からの短期大学生活で、私は今までの学生人生の中で一番勉強してきたのではないかと思ってしまうくらい、自分の勉強不足への後悔を感じ続けています。今年の秋からさらに追い込まれることは明らかですが、一方で自分がこの道を選んで、自分の勉強したいことをできているということはとても幸せなことなのだと思います。今年は、新しい学校ではより自分の可能性を広げていくのが目標です。新しい学校に入ると、新しい環境や友達と接することになりますが、その中に入っていくかいかないかは自分次第です。ボランティア活動やクラブ活動、異文化と交流できる機会などアメリカならではの活動や交流する機会に目を向け参加することで自分の知らなかった知識や世界、今までにはない自分を見つけることができるのではないかと思います。留学生活をしていく中で、 そのようなチャンスを掴むか掴まないかがいかに自分の考え方だけでなく、経験や知識を増やすことにつながるか再認識しました。
グローバル化が進む現代に必要な能力が生活を通して身につけられるということはとても素晴らしいことです。今年度は、このように自分の目の前にある機会に積極的にチャレンジし、自分の可能性を広げていきたいと思います。

※学年は2017年3月時点のものです。

基金運営活動収支報告

「夢を応援基金」活動収支計算書（2016年4月～2017年3月）

（単位：円）

昨年度からの繰越金		**357,692,720**
寄付金等収入		**134,195,725**
ローソングループ店頭募金	119,390,149	
ローソン寄付つき商品等　＊	687,830	
ポイント募金（Pontaポイント・ｄポイント）	601,310	
Loppi募金	1,024,500	
ローソンお取引先	8,336	
ローソングループ社内募金	12,483,600	
その他収入		**3,893**
受取利息	3,893	
収入合計		**134,199,618**
奨学金支出		**123,630,000**
奨学金（346名）	123,630,000	
基金運営支出		**10,170,251**
基金運営管理費用	10,158,263	
奨学金等振込手数料	11,988	
支出合計		**133,800,251**
次期繰越金		**358,092,087**

＊ローソン寄付つき商品等　：　ローソンオリジナル商品の売上金の一部等を寄付しています。

～寄付つき商品について～

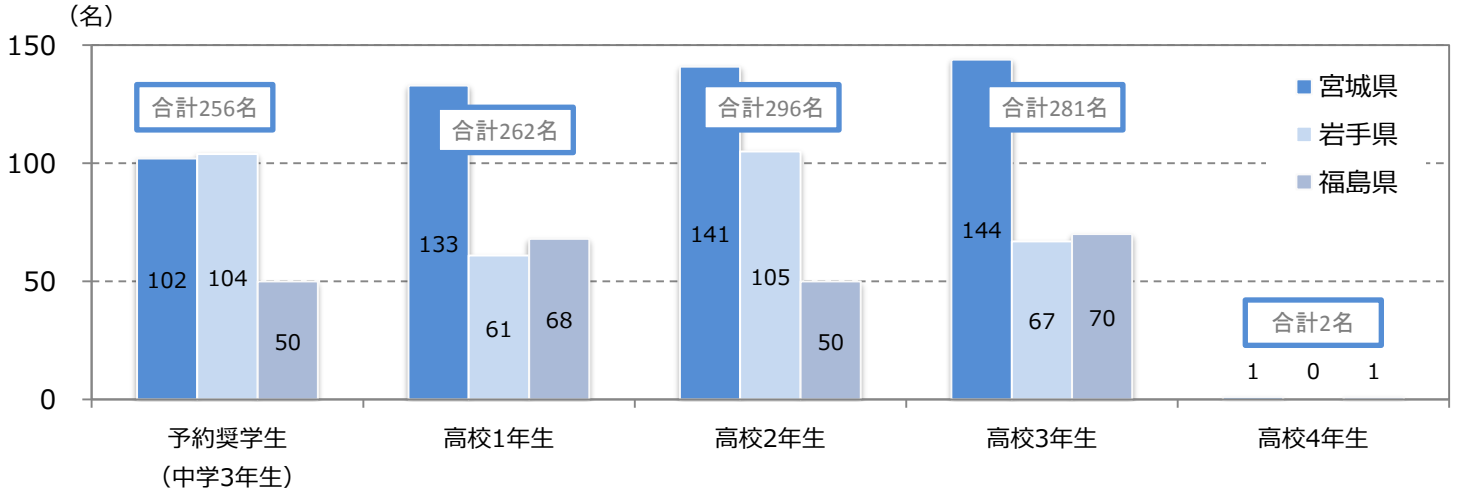
ローソンはお取引先様と連携し、売上金の一部を「夢を応援基金」に寄付する、寄付つき商品を随時販売しています。
今年度は、2017年3月に、「宮城県産金華さばの直火焼さば弁当」、宮城県産もういっこ苺をトッピングした「苺のモンブラン」、「からあげクン 奥州いわい監修 しょうゆダレ味」を全国販売しました。
また、このほかにもお弁当やおにぎり、デザートも東北エリア限定で販売されました。

宮城県産金華さばの直火焼さば弁当

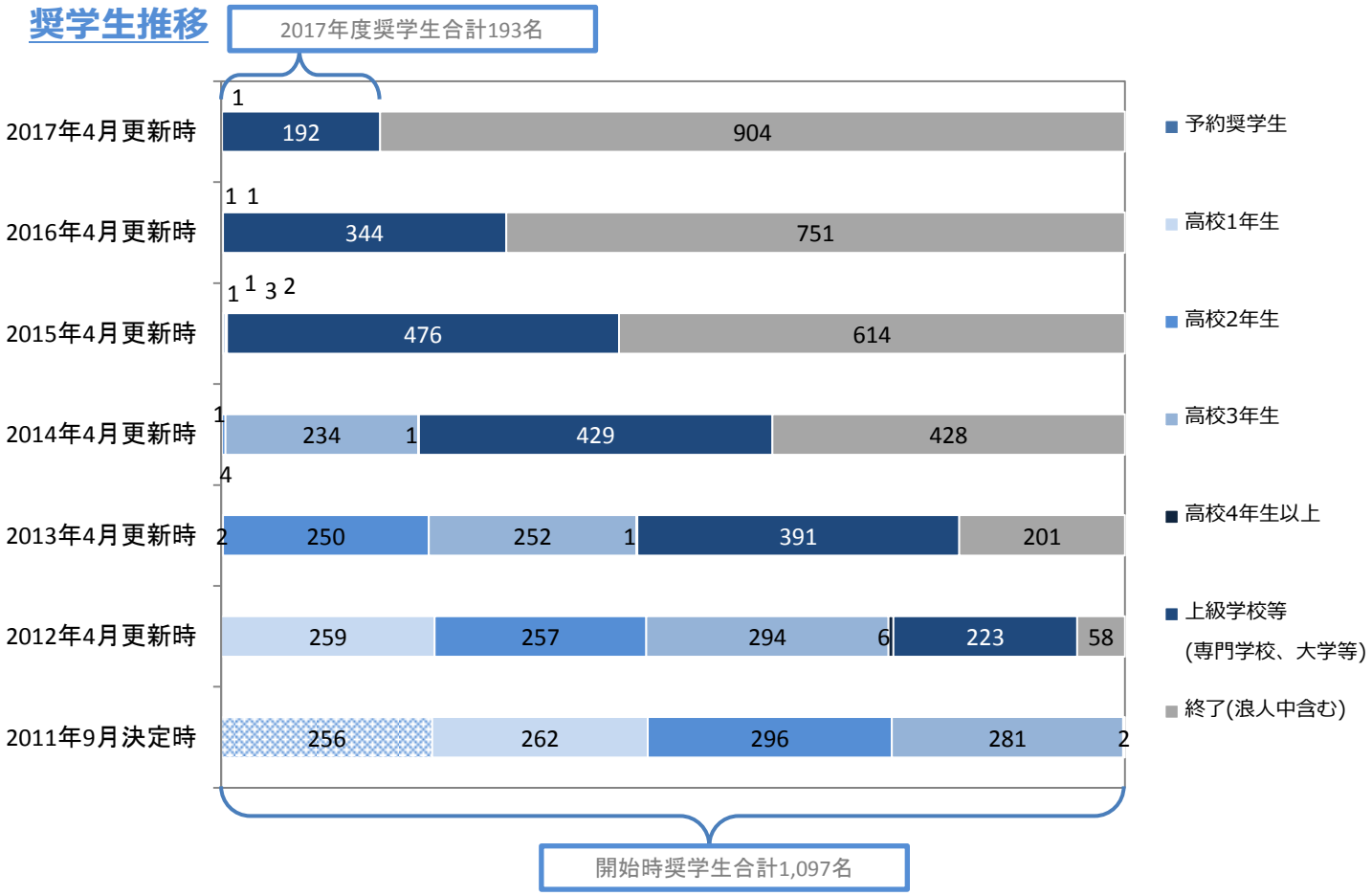
苺のモンブラン

奨学生等の状況

奨学生決定数内訳（合計1,097名。2011年9月末現在）

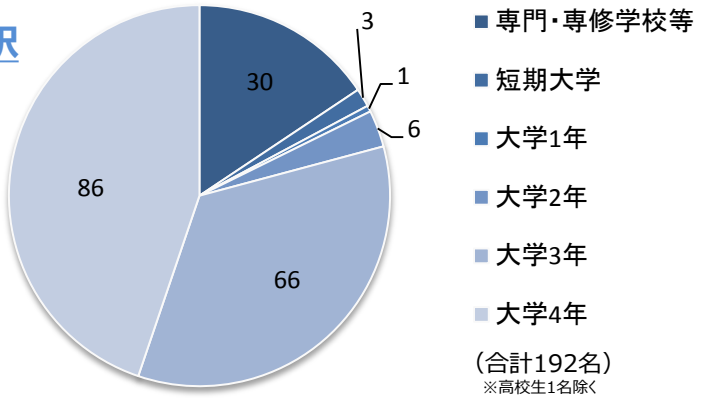


奨学生推移



*各生徒数は、2012年4月の更新手続きにおいて、募集時の情報の訂正等があり、以前に公表されたものと数値が異なる場合があります。

上級学校等奨学生数の内訳
（2017年4月更新時）



元気になろう日本

夢を応援基金

LAWSON

発行日：2017年6月30日